OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	桂枝雀の英語落語 : Rakugoの発見をめぐって
Author(s)	ムズラックル, ハリト
Citation	文化/批評. 2009, 1, p. 32-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75743
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

桂枝雀の英語落語

―― Rakugoの発見をめぐって ――

ムズラックル　ハリト

はじめに

その場のテーマソングとも言える出囃子に合わせて、着物姿の男性が高座といわれる舞台中央に座り、いよいよお馴染みの落語が始まると思ったら、噺家が客席に向かって「Thank you, Welcome to my Rakugo World」という挨拶言葉で高座を始め、そしてまた英語で噺を演じ続けると、古典落語の常連客は何を感じ取るのだろうか。

これは（故）桂枝雀[(1)]が開拓したとされる英語落語で、一見すると欧米のStand-up comedy[(2)]のようだが、立つのではなく座って演じられる、英語落語のパフォーマー自身の言葉を用いれば、Japanese Sit-down comedyである。落語に対してSit-down comedyという定義は、どこか物足りない気がするが、落語を知らない外国人にRakugoを説明する上で、手っ取り早い方法であることは理解できないことはない。

日本文化を代表する芸能といえば、「能」と「歌舞伎」があげられ、どうやら落語の存在は日本でしか知られていないようである。たとえば、世界で信頼度の高い英英辞典であるNew Oxford DICTIONARY of English[(3)]を引いてみると、「Kabuki」と「No(Noh)」は記載されているが、それに対し、300年以上の歴史を持っている、日本の伝統芸能である落語は載せられていない。世界の国々の辞典に掲載されていないということだけでは、むろん、世界の人、とりわけ西欧人によって、落語が発見されていないという証拠にはならないのだが、これは少なくともRakugoが世界のものになっていないことを示す一つの指標であろう。

そのような状況において、枝雀が始めたとされる英語落語はRakugoを国際語とする活動として大いに期待されるようになってきていると言える。演者のほとんどは上方落語の若手か素人であり、彼らは日本国内や海外公演を通じて、Rakugoという名を世界に広めることに力を入れている。枝雀は「英語落語のおかげで落語というものが世界中に広まったら楽しいでしょう」[(4)]と英語落語への期待を表している。1997年より、英語落語のプロデュースを手がけ、年に一回の海外公演を行ってきた大島希巳江は「海外公演の場合、まず日本文化の伝達ということが一番の目的である」[(5)]と述べている。

英語落語という形式を通して、「Rakugo」は日本を越える言葉となれるのか、この活動が世界の人が落語を発見することに繋がるのかは大きな関心事である。本稿では、こうした問題を考える前の段階として、数多くの海外公演で英語落語を演じてきた桂枝雀によって、落語は世界にどのように紹介されてきたのか、そして「英語落語」というのは何か、その実像に迫ると同時に、「落語から Rakugo へ」という歩みの可能性を探ってみることにする。

第一章　Rakugoの発見

「Rakugo」という言葉が世界の人の間で普及することは可能なのだろうか。それを考える上で、西欧世界の「能」と「歌舞伎」の発見に触れてみる必要がある。中村哲郎によれば、「十九世紀末から二十世紀初頭に至って、西欧人と能楽との間に爆発的な出会いが起こった。近代の西欧人が能の中に普遍的な精神の絶対力を認めた」。そして、そこから西欧人によって、能は翻訳され始め、研究対象となり、「世界のもの」となっていったと端的に言えるだろう。歌舞伎の場合は、海外における能研究と比較して、それほど研究されていないようではあるが、歌舞伎という言葉が西欧文献に初めて入ったのは『日葡辞書』[(6)]で、きわめて早い時期であるのは歌舞伎の存在感を感じさせるだろう。とはいっても、西欧人の間で「Kabuki」という言葉が普及したのは大正期以降[(7)]のことで、比較的遅い時期と言えるかもしれない。

落語の場合は西欧文献に入ることはほとんどないと言える。チェンバレンの日本案内である『*A Handbook for Travellers in Japan*』(1881) では「劇場」という項目の中に「能」と「歌舞伎」は紹介されているが、落語の存在には触れられていない。これは少なくとも、明治中期までに西欧人の落語又は寄席芸への認識のうすさを示し、外国人にとって落語は「数ある日本文化の一つ」として処理されていた、ということであろう。

しかし、特に落語の最盛期とも言える、明治初期から昭和初期にかけての時期に、落語が西欧人によって発見されなかったことは不思議なことでもある。明治 18 年 (1885) において、落語家の数は 683 人[(8)]、寄席の数は (講談席、義太夫席、浪花節の席、あるいは端席を含める) 199 軒もあり、寄席という空間は庶民の娯楽の場でもあった時代である。

しかし、来日して歌舞伎や能を実見した西欧人によって、当時のさまざまな見聞の記録が残されているのに対し、落語は最盛期にもかかわらず、西欧人と落語との接触は全くなかったのだろうか。と考えると、「快楽亭ブラック」というイギリス人の落語家の存在を無視するわけにはいかない。父親の仕事で 8 歳の時に来日し、明治から大正にかけて人気を呼んだこの外国人が落語を発見した初めての西欧人であるといえようが、この個人的な

発見は西欧人のRakugo発見ということに至らなかった。

快楽亭ブラックは日本に限って注目を浴び、有名人になり、死後に次第に忘れられていったのである。実は快楽亭ブラックこそが、落語が西欧人に発見されにくい原因についてのヒントを与えてくれるのである。『快楽亭ブラック伝』の中に、読売新聞の記者によるブラックへのインタビュー（1896年）があり、その中でブラックが次のように述べている。

> 西欧では全てこの芸人は賤しみやせん。こいがその芸人といっても普通の学問はありやすし、自分でも勉強してはげみやすから、ますます進んでまいりますが、ところが日本はまだこい（これ）ほど開けやせんで、この芸人というととかく賤しみやす（小島、10頁）

さらに、ブラックの友達の言葉からもヒントを得ることができる。

> キミは、なんで寄席芸人の道なんぞ選んだ。第一に、父親さんの名にかかわるよ。わらわれトモダチもみんな反対しているグレート・ブリテンのためにも、ニッポンの芸人はやめてくれ（小島、91頁）

厳しく迫る友達の他に、家では妹や弟も兄の職業に批判的であった。当時は、日本人の間にも芸人という者に対する差別意識が常にあったと思われるが、同様な意識は西欧にもあり、なかでもとりわけイギリスでは、大道芸人は卑しい地位の人とみなされていたと考えられる。この見方こそは西欧人が落語を発見できなかった、あるいは興味を示さなかった最大の原因なのかもしれない。

落語を発見しにくいものとした原因について考察をつづけよう。日本人によって書かれた文脈では、落語は世界に類例のない芸術であると言われ、枝雀も「笑いの芸は外国にもいろいろあるけれど、決まったコスチュームを着た人間が、一人だけで座ってお芝居して、聞き手のイマジネーションに訴え、頭の中に情景を描いてもらう形はない」[9]と落語のオリジナリティーを主張している。しかし、落語は歌舞伎や能と違って、形式として世界に類のない芸能とは言いにくい。つまり、下半身が固定されて、上半身が自由という形式として若干相違が見られても、落語と類似点を持つ物語の話芸（ストーリーテーリング）[10]は世界各地にも存在している。

たとえば、中国の「評書」というのは『水滸伝』や『三国志』を縦横に注をつけながら

座って講じる。また、トルコのメッダフルック[11]は下半身を固定して登場人物を一人で演じわけ、噺によってサゲもおかれている点でとりわけ落語と共通点が多いが、この二つは世界に存在する数多くのストーリーテーリングという芸能の中の二例である。

落語と同じく、こういった芸能は世界でストーリーテーリングの一つとして捉えられているためか、それぞれの名をあえて持ち出す必要がなかったのかもしれない。しかし、その中で落語の独特な点は、多様化した娯楽中で、300年前の形を崩さず、21世紀になった現在でも、聴衆を楽しませることのできる職業として、今世紀に残った、たった一つの話芸であることであろう。

ストーリーテーリングを職業にしている人間が日本にしか存在しないことは、落語が多様化したあらゆる娯楽からの抑圧を排除する力を持っていることを意味している。しかし、繰り返しになるが、ストーリーテーリングと称される物語の話術が数多くの文化にも見られ、その中でたった一つにすぎない落語は特に目立たないかもしれない。それに加えて、世界のストーリーテーリングと同様に、落語も粋な色っぽさはなく、扮装、かつら、化粧、背景など何も用いない。つまり、落語における形式的な問題は、能と歌舞伎の凛々しさに惹かれた外国人にとって、落語が発見しにくいものとなった一要因として考えられる。つまり、能と歌舞伎の視覚的享受は、聴覚面に重きが置かれている落語を発見しにくくした一つの要素であった。

異文化を理解しようとする時、やはり聴覚的な壁を越えなければ、表面的な理解しか得られない。その「聴く文化」という壁は、現在に至るまで異文化理解を求める外国人の落語への関心を妨げてきたのかもしれない。実は落語を通して日本文化を理解しようとしている著者もその壁に度々ぶつかっていると言わざるを得ない。しかし、落語は日本語で演じられているからこそ、その味が伝わりやすい、想像しやすい、理解しやすいところがあると感じることもある。

たとえば、古典落語の中に、現在、日常言語ではない言葉、あるいは死語になっている言葉がよく使用され、それが現代の日本の若年層は落語に対して、「言葉が古い」という否定的なイメージをいだくことにも繋がっている。しかし、その古い言葉を使うことによって、人物が表現しやすくなることがある。つまり、聞いている人が解らなくても、現代語に直さず、人物に成りきる手段として、あえて古い言葉を使う必要がある。

また、日本語には身分によって言葉の使い方が違うという特徴があり、「不肖、このわしが」といえば、侍は自分のことを卑下して言っているということになるが、町人は「不肖、このあっちは」と言わないだろうし、それを「Incompetent as I am」というように英語に訳すと、その侍らしさは薄くなってしまうだろう。同じく、僧侶は僧侶の言葉遣い

で、町の娘は町の娘の言葉で話し、そういう言葉を使うことによって、人物設定を容易にすることができる。したがって、言葉の深い味わいだけではなく、時代背景も見えやすくなってくるのである。

また、「落語には不文律がある。それは女を演じる場合、歌舞伎の女形のように声を作ってはならないということである。それは女に限らずどんな人物を演じるときでも同じことである。無理に声を作るのではなく言葉づかいと話し方で表現しなければならないのである」[12]。つまり、日本語の特徴によって無理に声を作らなくても、様々な人物が表現できるということは、演者の武器の一つでもあるが、その点、落語の海外進出において聴覚的な壁を乗り越える手段としての英語落語はマイナスになるかもしれない。

桂枝雀の英語落語は、海外で外国人を対象に英語で行われた日本初の試みではあるが、落語が日本を離れて海外で演じられたことはその以前にもあった。古今亭志ん生と三遊亭圓生がアジア太平洋戦争終戦直前に満州へ慰問のために行くなど[13]、海外在住の日本人のための落語会は現在でも海外公演の一つのパターンである。英語落語の公演も同様で、多くの客は海外在住の日本人や日系人であるため、海外における英語落語はある種の慰問活動でもあると言えよう。

それから、1990年代からは技術の発展が可能にした、字幕を映すという手法の普及により、桂小春団治や柳家さん喬をはじめ、日本語で「Rakugo」の海外進出に協力している落語家も出てきた。また、1980年代の手話ブームの勢いで広まり始めた「手話落語」の代表者、デブ一福氏も1991年以降に、ろう者会議などで公演を開いているなど、様々な形で落語は海外で紹介されている。だが、いずれも英語落語のように、日本のメディアの関心をそれほど引くことのない個人的な活動であったといえよう。

第二章　英語落語とその実像

この20年、日本人が耳にするようになってきた、新しい四字熟語である英語落語は二代目桂枝雀が開拓した落語における新しい試みであるが、日本社会と落語界において、英語落語をどのように位置づければよいのだろうか。英語落語は本来の「落語」から離れた新しいジャンルなのか、それともただ単に落語を英語に訳して演じることなのか。あるいは、落語を、日本の笑いを世界に紹介する過程で、最良の手段として捉えていいのだろうか。まず、英語落語の誕生とそのあとの経緯について述べておこう。

上田文世『笑わせて笑わせて桂枝雀』によると、1983年に英会話学校に通っていた枝雀が「落語を英語でしゃべってみたら？」と勧められたのが、英語落語誕生のきっかけとなった。米国英会話教師の協力を得て、初めて作り上げた長い噺は、古典落語の「夏の医

者」の英語版「*Summer Doctor*」である。1984年7月に、枝雀がスコットランドを訪ねた際に、「*Summer Doctor*」が出し物となり、約40人のスコットランド人の前で、初の海外公演が開かれることになる。

「日本人なんか、全く見たこともない土地でしょう。草原に集まってきた地元の人は、はじめはこのおっさん何者や、何するんやろうと、けげんな面もちだった。それが、終わるとわっと師匠のところへ駆け寄り、握手やサインをねだる。子供も大人も、みんな大喜びだった。落語を知らない、日本のことも全くしらない人を、あんなに笑わせる師匠は、すごいと思いました。」[14]と弟子の桂九雀が当日の様子を語っている。

枝雀の英語落語の正式な海外公演は1987年から始まり、1996年の米国公演までつづくが、枝雀の後も枝雀の影響を受けた演者が次から次へと誕生した。弟子の桂雀松の他に、桂枝雀一門ではない、若手の桂かい枝、桂あさ吉なども英語落語を演じ始め、中には日本人ではないパフォーマーもいる。彼らは欧米諸国のみならず、マレーシア、シンガポールなどでも海外公演を繰り返しており、「Rakugo」を世界のものにしたいという高い理想を持っている。

しかし、英語落語が最初から、落語を世界に発信しようという高い理想を揚げて誕生したとは考えられない。英語落語の人気のバックグラウンドを探れば、そこには枝雀の英語への情熱、こだわりがあったことがすぐさま浮かんでくる。つまり、英語落語を誕生させたのは、津田幸男がいう、日本社会における「英語支配」[15]だったとも言える。むろん、これは日本に限る問題ではなく、英語が国際社会において共通語、国際語とされ、世界の多くの人は英語を重視している。しかし、日本の場合、生活の隅々にまで英語は浸透しており、それは著者が来日して以来、目を疑っている日本社会の一面でもある。

新聞の一面全体に広がる英会話に関する広告、都市において全ての駅の周辺にあるといっても過言ではない英会話学校、ほとんど毎日放送される英会話のテレビ番組、本屋の棚に収まりきらない英会話学習書、幼児を対象とする英語保育園等々、日本は自発的に英語支配に協力していると思える。その点、英語落語も、「英語でしゃべらナイト」[16]、「英語は国際語だから学ぶべし」という英語推進・肯定論が目立っている日本社会において、再生産されつづけている英語の抑圧から生まれ、需要の大きさによって発展していっていると言えるだろう。

要するに、英語落語は英会話のできることが非常に重視されている日本社会において、多くの日本人が抱いていると思われる「英語病」[17]が生み出した、英語の新しい勉強方法として生まれたのである。

桂枝雀の英語落語に関する新聞記事を見てみると、枝雀に英語落語を続けさせた動機は、

日本文化を世界に伝達するということより、長年勉強してきた英語に自信を持ちたいという、英語へのこだわりだったと読み取ることができる。米国・カナダ公演の前に、「上方発・英語のお笑い」という見出しが付けられている、1987年2月16日の『朝日新聞』で、枝雀の英語落語への挑戦が主に紹介され、枝雀の写真の下に次のようなコメントが付されている。「小辞典を手に英字新聞に目を通し、"ほとんど単語をひかなくてもすむようになりました"」。ハワイ公演が実現した3日後の『朝日新聞』で「英語のオチも受けた」「身振りまじえ大汗　枝雀」という記事が記載された。下の引用はその記事の一部であるが、記事全体から感じ取られるのは、日本語なまりの英語でも、アメリカ人に通じたという安心感であろう。

> （前略）時にはとんちんかんな英語がかえって大うけして、会場をわかせる場面も。肝心な話のおちは米国人にも分かると見えて観客は大笑いして拍手していた。「日本語アクセントの強い英語だが、結構分かる。笑いについてはアメリカと違う点があると思うが、日本的笑いと文化の奥深さを見たようでおもしろかった」と満足そうに話す白人男性。（後略）（朝日新聞　1987年6月18日付）

そして、1988年に『枝雀のアクション英語高座――英語落語を楽しんで英会話が身につく本』を枝雀が自ら著したのも、枝雀が英語落語を英語の勉強方法として考えていた証拠である。それは、英語落語が次第にマーケティングされていくことの、第一歩でもあったと考えられる。

海外公演が始まって7年が経過しても、枝雀の英語との戦いがメディアの関心を引いている。1994年5月17日付の『朝日新聞』では「桂枝雀が米公演「大満足」「恒例の英語落語　自然体でできた」」という見出しが付けられ、枝雀は次のように述べている。「間違えたらどうしようと、緊張感を持ちながら演じていたこともありましたが、今回は自然体に近い形で演じることができました」と。

実は、枝雀の英語パフォーマンスの影響もあってか、1990年代から次第に『日本人英語でも恥ずかしくない』[18]という考え方が生まれ、インド人の英語、フランス人の英語、フィリピン人の英語、そしてイギリスでも地域によってさまざまな英語や英語の方言があるように、日本人英語もあり、その日本語発音の英語は日本人の新しいアイデンティティとして現れたのかもしれない。枝雀はまさにそのアイデンティティの象徴となっていたのではないだろうか。

枝雀は1996年のハワイ公演にて次のように述べ、それによって爆笑が起こるが、その

爆笑が英語落語こそが英語病に悩んでいる人々に与え得る最高の快感であろう。「Sorry, my English is little strange to you. Because My English is Japanese English and Osakan Dialect.」[19]（和訳：私の英語は少しおかしいかもしれません。というのも、私の英語は日本人英語で、しかも大阪なまりだからです。）

1990年代後半からは、枝雀にあこがれた若手の落語家のみならず、その時まで落語に縁がなかった一般の日本人が英会話の勉強を主な理由にして、英語落語に興味を示し始める。それが英語落語に関わる一般の日本人が落語を、広く言えば日本の伝統を再認識することに繋がったとも考えられる。

また、日本の中学校、高校の英語教科書にも英語落語が載るようになり、そして、「1996年4月にクリントン大統領訪日の際に開かれた昼食会にて英語落語をするように外務省から枝雀に手紙が届いた。都合で枝雀が出席できなかった」[20]が、これらは日本政府も英語落語に注目するようになってきたことを示していると解釈してよいだろう。次第に、大手英会話学校は落語家を講師に招くなど、英語落語が英語学習方法に強く結び付けられるようになっていくのである。

一方で、若手落語家の海外公演への挑戦が始まり、次第に「世界を笑わそ！」[21]という高い思想が生まれてくるのである。そして、「落語から Rakugo へ」[22]という挑戦がメディアの関心を引くようになり、日本の伝統芸能の落語は、世界の人を笑わせる「Rakugo」になりうるかと、落語における笑いの普遍性が注目されていくのである。

英語落語に力を入れている落語家も「アメリカの人を心底、笑わせたぜ、と演じていて快感だった。英語落語で世界に飛び出したい（桂かい枝）」[23]、「これから仕事として、世界に落語のマーケットを広げていきたい、営業として成り立たせたい（桂小春団治）」[24]と意欲を燃やし始めたのである。

このように若手落語家が毎年海外公演を重ねているうちに、海外の新聞や雑誌の取材を受けることもある。オーストラリアの『キャンベラ・タイムズ』で、英語落語が紹介される記事の見出しは「Delightful night of Japanese humour」[25]（和訳：日本人のユーモアで楽しい夜）、記事では「演者たちは座ったまま、観客を別の世界に連れて行った」と明るく評価する。そして、翌2002年のウェスト・オーストラリアンでの記事でも、落語の歴史的背景などに触れながら、英語落語によって日本文化理解もできると、取材を受けたプロデューサーの大島希巳江が述べている。しかし、公演タイトルは “Eigo-Rakugo, Japanese Sit-Down Comedy Performance in English” であり、これは、海外の記事や公演のチラシなどでもそのままの言葉で記載されている。というのも、「落語から Rakugo へ」ではなく、「落語から Eigo-Rakugo へ」または「落語から Sit-down comedy へ」と、

英語落語はまるで落語から離れた別なジャンルであるかのように、英語落語の独立が訴えられている。

「英語落語」という四字熟語が生まれたのは枝雀が海外公演を始めた後のことで、その前までは枝雀が「英語で落語」を演じると理解されていた。「Sit-down Comedy」という表現は上方の若手落語家の初海外公演（アメリカ公演）で使用され、公演のチラシには次のように書いている。"Rakugo can be best described as Japanese Sit-down Comedy" (26)（和訳：落語を最もよく描写できるのは日本のSit-down《座る》コメディーという表現である）さらに、英語落語のプロデューサーの大島希巳江は、次のように述べている。「「日本人にユーモアのセンスがあるの？」という外国人からの問いに、真面目で堅物な日本人というイメージを壊すには、欧米のStand-up comedyに対抗するSit-down comedyの落語しかないと思った」(27)と。つまり、欧米ではStand-up Comedyがあるように、日本ではSit-down Comedyがあるという形で、落語が紹介される。この表現を利用することによって、外国の客にとって分かりやすく、受け止めやすくすることが目的とされている。

しかし、これは国際語になっているNo, Noh（能、能楽）に関してJapanese Mask Theater (28)（和訳：日本の仮面劇）というのと変らぬ類似の表現で、落語という日本の伝統芸能を形だけで示すことになるのではないだろうか。それに、欧米のStand-up Comedyという一人芝居は批判性や社会性、そしてそういった主張のある雑談のまとまりであり、それに対し落語は無邪気ながらも、洗練された繊細な芸であり、日本社会が見えてきても、何かを批判する目的がないことから、Sit-down Comedyという言葉のニュアンスは誤解されやすいという点もある。

第三章　英語落語の構造

はたして、桂枝雀は英語落語を通して、「落語」を世界にどのように紹介してきたのか。英語落語は単に落語を英語に訳して演じることではなく、本来の落語とは別なジャンルとして考えてよいのだろうか。ここでは、本来の落語の構造と英語落語の構造を比較しながら、落語の国際化への道を考えていきたい。

（1）マエオキ

一人の演者が行なうひとまとまりの芸能として、落語をパフォーマンス的に、または言語的に考えれば、マエオキとは端的に言えば、噺家が高座に上がってから行う挨拶の言葉であり、その中で「えー、一席お笑いを申し上げます」という定型は、一般的に知られている挨拶言葉であろう。この挨拶は落語だけではなく、世界的にみてストーリーテーリン

グと称される話芸の一つの特徴であるとも言える[29]。国によっては、神に対して演出の無事を祈るという、宗教的な意味合いも含まれるこの部分において、話芸によって様々な言い方があり、噺家が自ら好意を伝えたいという気持ちは共通するだろう。

英語落語にもマエオキがおかれている。日本で英語落語を披露する場合、客の多くが日本人であるため、通常の日本語のマエオキでしゃべり始めることもあるが、英語でしゃべり始めると、マエオキであるだろうと考えられる定型的な表現が用いられる例が多い。以下は、枝雀が国内公演や海外公演で主に用いた、マエオキのパターンである。

> Thank you very much. Good afternoon ladies and gentleman. My name is Katsura Shikaju. I' m a Rakugo performer from Japan. Thank you for coming today to my Rakugo performance.[30]
>
> (和訳) どうもありがとうございました。こんにちは、(紳士淑女の) みなさん! 私は桂枝雀と申します。私は日本から参りました落語家です。今日、私の落語パフォーマンスを見に来てくださってありがとうございます。

最初の「ありがとうございました」は、拍手で迎えられたことに対する、お礼の言葉だと考えてよい。次に、自己紹介が加わるが、それは英語落語をチャレンジしている多くののパフォーマーに見られる。落語では、本来「めくり」と称される落語家の芸名と演目が寄席文字で書かれる紙があり、そのため名前をわざわざ述べる必要はない。しかし、海外公演の場合、演者はほとんどの客に初めて会うということもあり、そして名前を覚えてもらおうという望みもあるだろう。次に「Thank you for coming today to my Rakugo performance」という表現が使用されるが、これはいわば「お運びをいただきまして誠にありがとう存じます」に相当する表現であろう。

そして、枝雀が次のような表現をよく使用していた。'Please sit back, relax and enjoy the story' (和訳：緊張しないで、くつろいで、噺を楽しんでください)。現在、英語落語のパフォーマーがマエオキの部分、またはマクラに入れることが多いこの表現は、枝雀が展開した「笑いの要素は緊張と緩和である」という独自の落語理論へのこだわりから生まれたと考えてよいだろう。

枝雀にとって「落語」の最終目標は、「客に無用の緊張を与えず、楽に聞いてもらう」(桂枝雀、234頁) ことであった。このように枝雀は特に海外公演の場合、落語の形態を知らない客に、いかに緊張せず、気楽に落語を聞いてもらえるかを考えていたのである。

また、マエオキの部分と直接の関係はないが、海外公演の場合、'This is Rakugo' (和

訳：これは落語です）と言われる「落語とは何か」という説明とパフォーマンスが設けられることが多く、この部分によって客をある程度落語に馴染ませることが目的とされている。枝雀の 'This is Rakugo' を例に、この部分を利用する演者が多く、特に海外公演の場合の 'This is Rakugo' は欠かすことのできない、英語落語のマエオキとなっている。ストーリー性を持っているこの部分を短い噺として考えることもできる。

説明者のしゃべりに合わせて、演者が扇子、手ぬぐいを利用し、目線による表現、想像力の働かせ方、オチの役割などを演じながら見せていく。むろん、この部分抜きでも、マクラで似たような説明や演技によって、同じ効果が得られるが、このような導入は落語を知らない人間に対して、有力で優しいエントリーであるといえる。

（2）マクラ

マクラとは、本題に入る前に噺家が加える小噺、世間話または噺の時代背景などの説明を入れる、落語の導入部である。ここでは、沢田一矢が『マクラは落語をすくえるか』[31]の中でまとめている、マクラの形式・機能に基づいて、桂枝雀の英語落語における分析と考察を続けたい。沢田一矢によると落語のマクラには次のような四つの形式、機能がある。①客の反応を見る、②本題に関わる小噺、③さげの伏線、④風俗・習慣の解説、である。

現在の噺家はマクラの①という機能を利用することはおそらく少ないのであろうが、昔の噺家はマクラをふることで、その日の客にむいている噺を摑みとったと言われている。しかし、現在ではほとんど前もって演題が決まっている場合が多いため、演題を変えるまでにはいかないが、同じ噺でも客の反応によってさげを変えるなど、様々な工夫を加えることはあり得る。その意味で枝雀は、日本語落語を演じる際に、そのときどきによって噺の台詞を変えてみるなど、新しい試みに挑戦していたことでも知られている。

また、枝雀は「フリー落語」と言われる、あらかじめ用意した落語を演じるのではなく、客の反応からきっかけを摑み、しゃべりながら即興で噺を作っていくという話芸の達人であった。しかし、英語落語の場合、前もって決めたマクラや演目をやるしかなかった。いくら上手い噺家でも、英語を母国語としない枝雀にとって、客の反応を摑み、その場で工夫を加えることは極めて困難であったのであろう。そのため枝雀だけではなく、英語落語をチャレンジしている、ほとんどのパフォーマーは前もって用意していたマクラや噺を演じるのである。

マクラにおいて、次のパターンは②の「本題に関わる小噺」である。これは一番簡略な方法で、落語家の多くがこのパターンを用いている。たとえば、幽霊が登場する『へっつい幽霊』、『幽霊屋敷』などを演じる際のマクラに、幽霊の小噺をふっておくというパター

ンである。だが、海外公演の場合は小話をふる時間の余裕がなく、それよりも本題を楽しむために説明しておかなければならない形態が優先されるといえよう。その点、パターン③の「さげの伏線」もよく用いられる。たとえば、「たが屋」という噺がある。花火をほめるのに、昔は製造元の屋号をよんで、「玉屋」を「たーまーやー」というように声をかけたといっておく。オチが「たーまーやー」となる[32]からである。同様のことはパターン④である「風俗・習慣の解説」に対しても言えるだろう。

やはり、両方とも噺のバックグランドとなる慣習を説明しておかなければ、とりわけ英語落語の場合、噺自体が理解しづらくなってくる可能性が高い。そのため、マクラは落語の形式や笑いの質などに馴染みのない外国人の客に対する、大切な役割を果たしている。枝雀は英語落語のマクラのパターンとして、④の「風俗・習慣の解説」をよく用いたが、そこで目立つのはやはり枝雀の「客に緊張を与えない」というこだわりであった。

ここでは、枝雀の英語落語のマクラにおいて大いに利用されたパターンの一例を紹介しておこう。

> There are some differences between Rakugo and Stage Drama. When you see Stage Drama, There are many actors on the stage. Urouro, urouro. But tonight, You see only me in my Rakugo. There is nobody on the stage now okay. So, I play many different roles myself, O.K ? When you see a stage drama, actors on the stage wear some costumes. But, I play very different roles and I have no time to change them. I have nothing. But actually I have one special thing. It' s your imagination. [33]
>
> (和訳) 落語と舞台劇の間にはいくつかの相違がございます。舞台劇では何人かの役者が出演しています。うろうろ、うろうろ。しかし今夜、私の落語には私しかいません。私が様々な役を一人で演じます。舞台劇の場合、役者が様々な衣装を着ています。私は大勢の役を演じていますが、着替える時間はないんです。私は何もありません。しかし、実は私は特別なものを持っています。それは皆さんの想像力です。

上記は、海外公演におけるマクラとしては実に良い例であり、枝雀は海外公演だけではなく、国内公演でも似たような内容を語った。落語の形式やパフォーマンスの解説など、わりとまじめな話でも、面白く語り、落語を知らない客と落語との間の心理的距離が縮むことを重視した。上記の例では「うろうろ」という日本語の表現が用いられるが、それはおそらく会場に来ている日本人の客のために、枝雀があえて導入したのではないかと考えられる。演技中に時々日本語を交ぜるということは、とりわけ国内公演において、笑いを

とる方法として、大いに役立つ工夫でもあると言えよう。

（3）本題

本題は落語のストーリーに入る部分であり、とりわけ海外で英語落語を演じるにあたって、演題選びがもっとも重要なポイントであろう。ここからは、どういう噺が枝雀の英語落語の材料となっていたのか、について述べていくことにする。まず、枝雀が英語落語として演じた噺をリストアップしておこう。

・*Summer Doctor*	（夏の医者）	・*White Lion*	（動物園）
・*Happy*	（山の彼方）	・*Mt. Atago*	（愛宕山）
・*Bird Hunter*	（鷺とり）	・*Time Noodles*	（時うどん）
・*Kouzu Shrine*	（高津の富）	・*Samurai*	（宿屋仇）
・*Sake Drinker*	（親子酒）	・*Robot Shizuka-Chan*	（ロボットしずかちゃん）

枝雀が試みた英語落語の数はそれほど多くないが、海外公演の場合は公演ごとに客も変わっていたことを考えると、枝雀は十分な数のネタを持っていたといえる。枝雀の英語落語という試みが関西を中心にブーム[34]を起こしてから、数多くの英語落語のネタが生産されるようになった。その中で、枝雀が海外公演では受けが一番よかったと述べ、そして多くの海外公演で披露してきた、*White Lion*（動物園）という噺を取り上げたい。この噺は、今でもプロやアマチュアのパフォーマーによって演じられる回数が最も多い噺の一つである。参考までに、『動物園』という噺のあらすじを以下に略述しておこう。

> 男が動物園でトラの皮をかぶり、檻の中でブラブラしているだけでの一万円の仕事に就く。しかし、突然のアトラクションで「ライオンとトラの決闘をお目に掛けます」というアナウンスが流れ、トラの檻にライオンが入る。大変なことになったと思った男に近付いてきたライオンが、耳元で「大丈夫。わいも一万円で雇われたんや」という噺である。

『動物園』という演題は元来は略称であり、本来は、「動物園の虎」と言い、また別に「虎の見世物」「ライオン」「ライオンの見世物」とも称されている。この動物園は、二代目桂文之助の作で、明治の新作落語ということになる。昭和に入ってからは、関西ではほとんど演じられなくなった、この『動物園』について、『枝雀大全落語』第三十七集に収

録されている『動物園』演目解説では、次のように書いてある。「戦後、この「動物園」の噺の設定を当時できた移動動物園に変更し、東京の春風亭柳枝の高座や、文の家かしくの噺を参考にして仕立て直したのは、桂枝雀の師匠である桂米朝であります。以後、上方でも「動物園」のやり手が増えました」。桂枝雀はこの『動物園』を日本語で演じることが少なく、元来は、門下の桂九雀用の英語落語として英訳されたと言われている。枝雀によって *White Lion* が初めて演じられたのは、1987年8月31日に大阪・御津堂会館大ホールで開催された「第4回桂枝雀英語落語独演　海外帰国記念公演」で、初めての海外公演で演じられた『動物園』と『愛宕山』の二席が凱旋公演として演じられた。

枝雀は *White Lion* の受けが一番良かったことに対しては、『愛宕山』に登場する芸者を例に次のように述べている。

> 『Geisha Girl』などの噺の小道具で、"珍しいものを見ましたね" という受け方をするんじゃなくて、ひとつの娯楽としての「落語」という芸の型が受けたということですからね。この誤算は、嬉しい当てはずれになりました。よく「落語は古典芸能？」なんていうことが問題になるんですけれども、はからずも海外で「落語は『通』だけのものではなく、現代人に通用できる生きた芸能だ」ということが実証されたような気がします[35]。

枝雀は一つの娯楽として「落語」という芸の型が受けたと述べるが、この噺の受けとなる要素は何であったのだろうか。枝雀は、「枝雀のアクション英語講座」の中で、*White Lion* のことをこう記している。「山本先生〔英語落語の仕かけ人である、HOE インターナショナル代表・山本正昭氏〕が言わはるには、ここ『White Lion』には、英会話として必要な基本文形は、ほとんど網羅されてるそうです。ですから、この落語を覚えてしまえば、基礎会話はマスターしたも同然ということになります」。つまり、国内公演においては、有名な噺が分かりやすい英語で演じられているという点とやはり英語学習に役立つという点は、この *White Lion* の国内における人気の秘密であろう。

海外公演の場合、この噺は外国人の客には馴染みやすかったと考えられる。実は、この噺は西欧の小話（ジョーク）であるとされ、この噺に日本のローカル・カラーと言える要素が少ないことからも分かる。国や作者について明確なデータはないが、この噺は、明治時代に西欧人によって提供された、多数ある西欧人情噺や外国小説の中の一つであると考えられる。二代目桂文之助はこの『動物園』を日本語にするときに、この噺が、将来、日本語から英語に翻訳され、海外でも演じられるようになり、国内では英会話の教材として使用されるよ

うになるとは想像もつかなかっただろう。

むろん、枝雀が英語落語にした噺すべてが日本のローカル・カラーの薄いものではない。中には日本的な要素の豊かさが感じられる演目もある。そのような噺においては、外国人の客にとって、イメージしやすくなるように、もっといえば、笑いがとれるように、様々な工夫が行われる。しかし、そういった工夫によって、日本の噺だからこそ入っている要素がなくなることもあり、それは、英語落語を通して、日本文化を世界に伝達しようとする際には、避けることのできない落とし穴かもしれない。

（4）オチ（ブラックユーモアの魅力）

噺の結末としての効果的なしゃれとして、大事な役割を果たす「オチ」は、外国のジョークにも見られるpunch line（パンチライン）という聞かせ所である。落語のオチに様々な種類があり、枝雀も自ら立てた、「笑いは緊張の緩和によって起こる」という理論と平行して落語のオチを4種類に分類した。枝雀は客がどこで笑いを感じるかに視点を定めて、科学的に分類するなど、落語におけるオチの重要性について考えていた落語家でもあった。むろん、英語落語の海外公演の場合にも、オチの部分にこだわっていた。オチについて、*Bird Hunter*と訳された『鷺とり』という古典落語を取り上げて、「落語からRakugoへ」という望ましい状態について考察を続けたい。

『鷺とり』の本来の「オチ」だと、五重の塔の天辺から主人公が飛び降りると、四人の僧侶が大きい布団を広げて下で待ち受けている。しかし、その真ん中へ落ちたため、はずみで主人公が助かり、四人の僧侶が亡くなるというオチの噺である。しかし、枝雀はこのようなオチだと、外国の人にとってブラックユーモア的になるのではないかと思い、オチを次のように変えたのである。塔から布団めがけて、飛び降りるところから「So he bounded up high into the air and landed again on the same place, on the top of the PAGODA.」としている。すなわち、「布団で跳ね返ってしまい、元の五重の塔の天辺に戻ってしまった・・というわけである」[36]。なぜ枝雀がこの噺において、本来のオチだと外国人に受けないと思っていたのだろうか。あるいは、なぜ枝雀はブラックユーモア的な要素のある噺を英語落語の題材から外したのだろうか。

まず言えるのは、噺を「死人が出ないように変えてみる」[37]という、文化の違いに対する気遣いであろう。そして、枝雀が英語落語を主に英語の習得法として考えていたことから、比較的に英語学習に役立つような表現を求めたため、複雑な内容のある噺を避けていたことも考えられる。つまり、何らかの形で死を扱っている落語は、枝雀がイメージした英語落語からかけ離れ、そういった題材は外国人に無用な緊張感を与えるのではないか

という心配があったようである。そのためか、枝雀の英語落語の中に怪談的な要素が全く入っていない。

しかし、枝雀が提唱した「笑いの要素は緊張と緩和である」という理論から考えても、落語における怪談的な要素は「怖いもの見たさ」から生み出される普遍的な緊張感であり、その緊張感が緩和されることで、笑いが生産される可能性は十分ある。それは、怪談噺、怪異譚、またはいわゆる滑稽怪談における、笑いのパターンでもあるのであって、そういった緊張感を外国人が求めないという判断は正当であったのかというところは、外国人である著者自身が指摘しようとしている一つの疑問点である。そこで今後の課題として、こういった要素に関する外国人の考え方と、枝雀がイメージしていた外国人像との間におけるズレについて調査する予定である。

枝雀が心配したこととは相違があるかもしれないが、日本人がイメージしている外国人像と実際の外国人が考えていることの間におけるズレの一例として、以下の実例が挙げられるだろう。それは史上初の訪米歌舞伎団によって、ニューヨークで公演が開催された際（1960年5月27日）に話題になったものである。『仮名手本忠臣蔵』という作品の「判官切腹」の場について日本の外務省からクレームがつき、このことに関して数多くの歌舞伎の海外公演に関わった、河竹登志夫が次のように述べている。「これを外国で見せると、日本では今でも切腹があると思われるのではないか、あるいは切腹が賞賛されていると誤解されはしないか」[38]。しかし、訪米歌舞伎の提案者、推進者であったフォービオン・バワーズが「歌舞伎は古典芸術です。歌舞伎の舞台で切腹があるから、今の日本人も切腹が好きだなって、そんなことをおもうアメリカ人は一人もありません」と力説すると、外務省は安心し、上演は実現したということである。誤解が生じなかったのかというと、それどころか、「7つの演目中最高の評価がこの作品に与えられた」という。

その点、怪談噺に見られるような、古くからあった「死や死後の世界、あるいは幽霊を笑いにする」という発想も、日本人ではない人にとって、非常に興味深い日本的な要素ではないかと考えられる。たとえば、狂言の『朝比奈』では、「『曾我物語』[39]に出てくる朝比奈三郎が地獄極楽の六道の辻で閻魔に出会い、閻魔大王を脅かして、極楽への道案内をさせる」というのがある。そして、歌舞伎にも似たような発想が見られ、死後の世界が描写されている「あらし小六過去物語」について、近世上方芸能史専門の荻田清が次のように述べている。「これほど腹を抱えさせるものはないと思う」[40]と。そういった発想は落語にも影響を与え、また落語の滑稽怪談という形の原型となったとも考えられる。

桂米朝の、亡者が閻魔の庁に自分の「死因自慢」をしながら歩むという『地獄八景亡者戯』にも、死後の世界が面白く描かれ、他にも、自分の死体を自分で担ぐという『粗忽長

屋』、商売をする幽霊が登場する『皿屋敷』、死体を担いで大家の前で死体でカンカン能を踊ってみせるという『らくだ』など、外国人の客が不気味に感じ取るのではないかと思われるような、死や幽霊を笑いの題材にする噺が少なくない。古典落語だけで、そういった発想をモチーフにする噺は、少なくとも50以上あることは非常に興味深い。

このような怪談あるいは怪異譚を枝雀もよく演じ、『まんじゅうこわい』『貧乏神』『雨乞い源兵衛』『天神山』『一人酒盛』『こぶ弁慶』『仔猫』『蛇含草』『夏の医者』『幽霊の辻』『茶漬えんま』『首提灯』『七度狐』『不動坊』『義眼』『地獄八景亡者戯』など、枝雀は怪談噺のパフォーマーという側面を持っていたと言えるだろう。ここで枝雀が演じたこういった噺を全部おさらいする余地はないが、笑いの要素を含みつつ、どこか小泉八雲の怪談を思い出させる二つの噺を簡単に紹介してみよう。

小佐田定雄の創作落語の『幽霊の辻』は次のような内容である。友達から預かった手紙を届けに堀越村に行く男が、田舎のお婆ちゃんに道案内をしてもらうが、田舎の一本道を提灯の明かりを頼りに行く。しかし、水子池、首なし地蔵、父追い橋、首くくりの松のある幽霊の辻を通って行かなければならない。ようやく幽霊の辻を通ろうとすると、木の間から現れる女が、「あたしは幽霊じゃないとでも思ってなさるの？」というサゲである。古典落語の『一人酒盛』も似たようなパターンである。友達を飲みに誘う男が、一人でしゃべり、一人で飲み、二人で飲むべきところを墓に話しかけながら一人で飲んだという噺である。

上記で述べた枝雀の怪談のレパートリーの中で、『夏の医者』と『まんじゅうこわい』の二つだけは、枝雀によって英語落語にされた怪異譚である。しかし、この二つがなぜ英語落語になったのかと考えれば、そこにはやはり枝雀流の目的が現れる。『夏の医者』は主人公と医者が大蛇に呑まれ、人間の言葉をしゃべるウワバミが「だめじゃ、夏のイシャは腹にさわる」というサゲで終わる。まるで不思議の国の少女のアリスの世界の一節を聞いているかのようなお伽噺で、いかにも西欧にもあるような噺である。

さらに、この噺は言葉遊び的要素が弱い点で、客に分かりやすいというのが、枝雀がこの噺を選んだ目的であると考えられる。そして、枝雀が英語落語にし、弟子のむ雀が演じる『まんじゅうこわい』も同様で、やさしい表現が使用され、主に日本人の客が対象とされていたことが分かる。さらに、なぜか「まんじゅうこわい」のピークの部分である怪談のところは、英語版では抜かれている。枝雀は怪談を英語落語にすることを、意図的に避けたのではないかと改めて考えさせられるのである。

枝雀には、「SR-Short Rakugo」という連作がある。大部分が「死」を扱ったブラックユーモア的な小話から構成されており、彼の怪談に対するこだわりが感じられる試みであ

る。枝雀は「SR」の中の「犬」という小話を英語に翻訳したが、「犬」は、この連作の中で珍しく怪談的な要素がない小話である。このことは、枝雀における英語落語と怪談の不幸な関係と無関係ではないだろう。

むろん、こういった噺に対して不快に感じる外国人もいるかもしれないが、外国の客も噺を積極的に理解しようと思っているのであり、こういった日本文化の一面に惹かれる可能性も十分あるのではないだろうか。というのも、枝雀が求めた異文化に通じ合うという「落語の笑い」は落語には国際的な評価を与えないかもしれないからである。その点、1996年のアメリカ公演で取材を行った女性記者が、落語の笑いについて述べたことは、注目を値する。「日本の風習が分からなくても理解でき、どこの国でやっても受けると思う。しかし、罪のない無邪気な笑いで、批判性や社会性、主張がない。インテリ層には受けないんじゃないかな」(41)。

おわりに

以上は、桂枝雀が開拓した英語落語の構造と実像に関して述べたものである。以上を踏まえて言えることは、枝雀が主に英語の学習法として英語落語を考えた一方で、「英語落語のおかげで落語というものが世界中に広まったら」という希望をも持っており、英語落語を通して世界に通じる落語の笑いを追求していた、ということであろう。同様な傾向が枝雀以外の英語落語のパフォーマーにも見られ、日本人の真面目で堅物なイメージを変える手段としても英語落語が考えられていると言えよう。

しかし、日本人の笑い、日本の笑いの文化を紹介する際に、果たして落語は最も適切な代表なのだろうか。このように考えれば、そこには日本の笑いの原型とも言える狂言があり、そして意外な結びつきかもしれないが、歌舞伎の中の笑いがあり、そして現代的に言えば漫才にも笑いは欠かせないものであるのではないだろうか。というのも、日本人の笑いの文化は落語だけに見出される要素ではなく、さらに言えば、落語は現代の日本の「お笑い」といえる枠組みにも入っていないかもしれないからである。それに、落語には滑稽話だけではなく、人情噺、怪談噺という笑えるところが少ない噺もあり、落語の特徴は滑稽的な要素だけではないのである。

また、特に何かを主張するという、たとえば戦争や環境問題をクローズアップするようなことは、決して落語のテーマではないため、外国人が噺を楽しめるとしても、落語において、意志はほとんどないかもしれない。無論、枝雀が日本語で演じてきた噺の中に社会性を見出そうとすれば、それは可能であり、そこには何らかの批判性も現れてくるだろう。たとえば、『代書』という噺を取り上げてみよう。『代書』は昭和10年代に政府が国民に

氏名、本籍、年齢、職業などの国家の制度を押し付けた際に、身分制社会で平気で暮らしていた庶民がぶつかった問題を扱っている。この噺は作者の四代目桂米團治の当時の官僚制に対する本音の現れであったと思われ、身分制社会の中で日本人にはアイデンティティの不安はなかったことなどが伝わりつつ、落語におけるドキュメンタリー性も感じ取られる。枝雀は日中戦争下の日本の国民の戸籍点検という問題をさりげなく笑い飛ばし、この噺をもっとも好かれる爆笑物の一つとしたのであるが、「落語からRakugoへ」の可能性を考える際には、無邪気な笑いというより、『代書』のような社会性を包んでいる風刺的な笑いの中に「世界に通じる日本の笑い」(42)を求める過程が必要かもしれない。

1980年代に始まった英語落語は、枝雀を軸に基盤ができつつあり、とりわけ日本国内でこれからも人気を増していくと思われる。しかし、日本では話術レベルの英語落語を理解できる客層が存在しないため、英語落語はこれからも、英会話の楽しい学習方法として評価されるだろう。海外公演においても同様で、海外在住の日本人のための慰問活動として定着しつつある英語落語が、国際的に認められる芸能としてのステータスを得ていけるかは、現時点では判断できない。しかし、その過程において、「世界のRakugo」という終点にたどり着くことは、日本人パフォーマーや英語での落語にこだわらず、世界の国々で、たとえばフランスでフランス人役者によるフランス語でのRakugo、ロシアでロシア人によるロシア語でのRakugoの誕生に深く関係しているようにも思える。

注

（1）桂枝雀（かつら・しじゃく）、1939年神戸生まれ。'61年神戸大学文学部を中退し、桂米朝に入門。翌年、桂小米（こよね）となり、'73年に2代目桂枝雀を襲名。「爆笑王」の異名をとる上方落語のスター的存在。（桂枝雀『らくごDE枝雀』ちくま文庫 1993年）

（2）演技より、おしゃべりが主の西欧の漫談（Microsoft Corporation. Microsoft Bookshelf Basic 3.0 Dictionary. 1987-2001）

（3）New Oxford DICTIONARY of English, by Oxford University Press inc., New York. 1998

（4）桂枝雀『枝雀のアクション英語講座』祥伝社、1988年、235頁。

（5）大島希巳江「異文化コミュニケーションにおけるユーモアの効果」ハワードベット＋文学と笑い研究会『笑いと創造』第4集、勉誠出版、2005年、129頁。

（6）日葡辞書（Vocabvlario da Lingoa de Iapam）日本イエズス会が長崎学林で1603年（慶長8）に刊行した日本語・葡萄牙（ポルトガル）語の辞書。広辞苑　第五版　岩波書店　1998年。

（7）中村哲郎『西欧人の歌舞伎発見』劇書房、1982年、217頁。

(8) 小島貞二『快楽亭ブラック伝』決定版、文進堂、1997年、110頁。
(9) 朝日新聞（大阪版）1987年2月16日、桂枝雀「上方発　英語のお笑い」
(10) Story Telling, 物語を話す（こと）、物語の話術。『G3ジーニアス英和辞典』第三版、大修館書店、2001年。
(11) Meddahlık: オスマントルコ時代に生まれた話芸。Ünver Oral『*Meddah Kitabı*』Kitabevi、2003年　（タイトルの和訳：『メッダフの本』。
(12) 野村雅昭『落語の言語学』平凡社、2002年、32頁。
(13) 川戸卓吉『現代落語家論《下巻》』弘文出版、1993年　参照。
(14) 上田文世『笑わせて笑わせて桂枝雀』淡交社、2003年、124頁。
(15) 津田幸男は英語の優位と地球的拡散を「英語支配」と述べ、英語の上達を目指し、そのための効果的な教育方法を考える対応も英語支配の影響であると考えている。津田幸男『英語支配とは何か』朝石書店、2003年、参照。
(16) 「英語でしゃべらナイト」：NHKで2001年～2002年に3回特別番組として放送され、好評だったことを受けて、2003年3月31日からレギュラーで放送されている英語トークバラエティー番組。
(17) 津田幸男によると、英会話は、日本人に英語やアメリカへの憧れやコンプレックスをあおることにより、日本人を「英語漬け」にし、「英語病」を生み出している。英会話症候群。
(18) 寺澤芳男『日本人英語でも恥ずかしくない』東洋経済新報社、1999年。
(19) 「枝雀英語落語 IN USA TOCZ-5168［CD］」1996年6月2日　White Lionのマクラにて。
(20) 「教授でビュー（枝雀 in USA 英語落語の旅：下）」『朝日新聞』（大阪）1996年6月26日付夕刊。
(21) 「世界を笑わそ！」『朝日新聞』（大阪）1998年10月22日付。
(22) 1）大島希巳江『落語からRakugoへ』Journal of English Teaching. UNICORN JOURNAL SUMMER 2000年 No:53。
2）「世界で一席　落語から「Rakugo」へ」『朝日新聞』（大阪）2001年10月19日付夕刊。
(23) 「自信（いざ、アメリカへ　若手落語家の挑戦）」『朝日新聞』（大阪）1998年10月26日付夕刊。
(24) 「世界で一席　落語から「Rakugo」へ」『朝日新聞』（大阪）2001年10月19日付夕刊。
(25) http://www.english-rakugo.com/english_version/english_performance_au.html
(2006年8月12日ダウンロード)
(26) http://www.english-rakugo.com/english_version/english_performance.html
(2006年5月22日ダウンロード)
(27) Foreign Press Center Japan. People in the news. 2002年6月
(28) 著者が一例として、このJapanese Mask Theater（日本の仮面劇）という言い方を創作したのであり、実際に能楽に対してこの言い方は用いられていない。
(29) Özdemir Nutku『Meddahlık ve Meddah Hikayeleri』AKM Başkanlığı Yayınları、1997年、参照。
(30) 『枝雀英語落語 IN USA TOCZ-5168［CD］』1996年。

(31)　澤田一矢『まくらは落語をすくえるか』筑摩書房、1989年。
(32)　野村、54頁。
(33)　桂枝雀／英語落語、*Bird Hunter*、1989年4月28日、歌舞伎座にて。
(34)　「「英語落語」関西でブーム」『東京新聞』芸能・番組〔18〕、2001年6月29日付。
(35)　桂枝雀、230頁。
(36)　桂枝雀、101頁。
(37)　桂枝雀、101頁。
(38)　河竹登志夫『舞台の奥の日本』TBSブリタニカ、2000年、10頁。
(39)　荻田清『笑いの歌舞伎史』朝日新聞社、2004年、224頁。
(40)　荻田、224頁。
(41)　「罪のない笑い、枝雀in USA　英語落語の旅：中」『朝日新聞』（大阪）1996年6月25日付夕刊。
(42)　東京新聞　2001年6月29日　芸能・番組〔18〕『世界に通じる日本の笑い』

【引用・参考文献リスト】

〔単行本・論文〕

阿刀田高　編『ブラック・ユーモア傑作選』光文社文庫　1989年
イアン・マッカーサー『快楽亭ブラック』講談社　1992年
上田文世『笑わせて笑わせて桂枝雀』淡交社　2003年
荻田清『笑いの歌舞伎史』朝日新聞社　2004年
大島希巳江『異文化コミュニケーションにおけるユーモアの効果』ハワードベット＋文学と笑い研究会「笑いと創造」第四集　勉誠出版　2005年
大島希巳江『落語からRakugoへ』Journal of English Teaching. UNICORN JOURNAL SUMMER 2000年　No:53
桂枝雀『らくごDE枝雀』ちくま文庫1993年
川戸卓吉『現代落語家論《下巻》』弘文出版　1978年
河竹登志夫『舞台の奥の日本』TBSブリタニカ2000年
小島貞二『快楽亭ブラック伝』決定版　文進堂　1997年
澤田一矢『まくらは落語をすくえるか』筑摩書房　1989年
津田幸男『英語支配とは何か』明石書店　2003年
寺澤芳男『日本人英語でも恥ずかしくない』東洋経済新報社1999年
野村雅昭『落語の言語学』平凡社　2002年
中村哲郎『西欧人の歌舞伎発見』劇書房　1982年

増山英太郎・勝見正彦「枝雀によるオチの４分類の実験的検討」『人間工学』30　1994年
Basil Hall Chamberlain & W.B.Mason『A Handbook for Travellers in Japan』London: S.Muray Yokohama:Kelly & Walsh 1891年
Ünver Oral『Meddah Kitabı』Kitabevi 2003年（タイトルの和訳：メッダフの本）

〔辞典〕
広辞苑　第五版　岩波書店　1998年
G3ジーニアス英和辞典　第三版　大修館書店 2001年
Microsoft Corporation. Microsoft Bookshelf Basic 3.0 Dictionary. 1987-2001
New Oxford DICTIONARY of English, by Oxford University Press inc., New York. 1998
日葡辞書　邦訳　土井忠生［ほか］編訳　岩波書店　1980年

〔記事〕
「上方発　英語のお笑い」『朝日新聞』（大阪）1987年２月16日付　夕刊
「英語のオチも受けた」『朝日新聞』（大阪）1987年６月18日付　夕刊
「罪のない笑い、枝雀 in USA　英語落語の旅：中」『朝日新聞』（大阪）1996年６月25日付　夕刊
「枝雀 in USA 英語落語の旅：下」『朝日新聞』（大阪）1996年６月26日付　夕刊
「世界を笑わそ！」『朝日新聞』（大阪）1998年10月22日付
「自信「いざ、アメリカへ　若手落語家の挑戦」」『朝日新聞』（大阪）1998年10月26日付　夕刊
「世界で一席　落語から「Rakugo」へ」『朝日新聞』（大阪）2001年10月19日付　夕刊
「「英語落語」関西でブーム」『東京新聞』芸能・番組〔18〕、2001年６月29日付
Foreign Press Center Japan. People in the news.2002年６月

〔VHS〕
桂枝雀／英語落語「Bird Hunter、This is Rakugo、Mt.Atago」1989年４月28日
桂枝雀「くやみ」NHK教育テレビ日本の話芸より、平成４年２月14日放送
柳家さん喬「中村仲蔵」NHK教育テレビ日本の話芸より、平成13年１月13日放送
ABC「枝雀寄席（ロボットしずかちゃん）」1987年５月23日

〔DVD〕

桂枝雀『大全落語　第三十七集（植木屋娘／動物園／権兵衛狸）』東芝EMI株式会社 2003年

桂枝雀『大全落語　第十集（地獄八景亡者戯〔前編〕／地獄八景亡者戯〔後編〕／SR）』東芝EMI株式会社2000年

〔CD〕

桂枝雀『枝雀英語落語 IN USA TOCZ-5168』1996年6月2日

桂枝雀『桂枝雀落語らいぶ（幽霊の辻）』1994年6月30日　鈴本演芸場にて収録

桂枝雀『桂枝雀落語らいぶ（代書）』1992年7月19日　大阪サンケイホールにて収録

桂枝雀『Rakugo in English (HAPPY)』1995年5月23日

桂枝雀『大全落語　第三十七集（Toki-Udon）』TOCZ-5124 1994年2月10日

〔インターネット資料〕

【英語落語】

（1）http://www.english-rakugo.com/english_version/english_performance.html（2006年5月22日ダウンロード）

（2）http://www.english-rakugo.com/english_version/english_performance_au.html（2006年8月12日ダウンロード）